

各 農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー 所 長 様
各 農 業 協 同 組 合 長 (営 農 担 当 者) 様
各 病 害 虫 調 査 協 力 員 様
各 農 業 関 係 機 関 長 ・ 団 体 長 様

京 都 府 病 害 虫 防 除 所 長
(公 印 省 略)

病 害 虫 発 生 予 察 情 報 に つ い て

下 記 の と お り 発 表 し ま し た の で 送 付 し ま す 。

病 害 虫 発 生 予 報 第 7 号 (9 月)

予 報 の 概 要

作 物 名	病 害 虫 名	予 想 発 生 量 < 平 年 比 (前 年 比) >	作 物 名	病 害 虫 名	予 想 発 生 量 < 平 年 比 (前 年 比) >
イ ネ	穂 い も ち	少 (少)	チャ	チャノホソガ	山城：やや少(やや少) 丹波：並(やや多) 発生時期 山城：遅 丹波：並
	紋 枯 病	少 (少)		カンザワハダニ	並～やや多(並)
	トビイロウンカ	並 (並)		チャノミドリヒメヨコハ ^イ	山城：やや少(やや多) 丹波：多(多)
ダイズ	コブノメイガ	やや少(少)	野菜	チャノキイロアザ ^{ミウマ}	山城：並～やや多(並) 丹波：やや少～並(少)
	斑 点 米 カ ム シ 類	並		クワシロカイカ ^{ラムシ}	山城：並(少) 丹波：多(多)
	ハスモンヨトウ	やや少(やや少)		うどんこ病(果菜類)	並(やや少)
アズキ	カメムシ類	やや少(並)	疫病・褐色腐敗	並(並)	
	ハダニ類	やや少(やや少)	病(キュウリ等)		
	ハスモンヨトウ	並(やや少)	褐斑病(キュウリ)	やや多(並)	
果 樹	ハダニ類	並(並)	炭そ病(キュウリ)	並(並)	
	ナシ黒斑病	並(やや多)	ハダニ類	並～やや多(並)	
	ナシ黒星病	並(並)	アブラムシ類	並～やや多(並)	
チャ	ブドウべと病	やや少(少)	(ア ^ラ 科等)	やや少～並(やや少)	
	カキ炭そ病	並(やや少)	アザミウマ類	(果菜類)	並(やや少)
	カキうどんこ病	並(多)	ネギアザミウマ	並(やや多)	
野菜	カメムシ類	やや少(少)	ネキ ^{ハモク} リ ^ハ エ	並(やや多)	
	ハダニ類(ブドウ)	多(並)	ハモク ^リ ハ ^エ 類	並～やや多(並)	
	ハダニ類(ナシ・ミカン)	やや少(やや少)	(果菜类等)		
チャ	炭そ病	やや少(並)	コナガ	並(並)	
	もち病	並(並)	シロヒ ^メ イカ ^カ	やや少～並	
	チャノコカクモンハマキ	並(山城：少) (丹波：並) 発生時期：並	ハスモンヨトウ	やや少～並(並)	

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 発生及び被害等の程度 - - - 程度は甚、多、中、少、無の5段階に分ける。
それぞれの病害虫の基準については各作物の項参照。

4 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

5 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

近畿地方 1 か月予報

(8 月 1 8 日から 9 月 1 7 日までの天候見通し)

平成 1 9 年 8 月 1 7 日
大阪管区气象台 発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。後半を中心に、天気のぐずつく時期がある見込みです。

向こう 1 か月の気温は平年並または高い確率ともに 4 0 % です。

週別の気温は、1 週目と 2 週目は平年並または高い確率ともに 4 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

		低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温		2 0	4 0	4 0
降 水 量	近 畿 地 方	3 0	4 0	3 0
日 照 時 間		3 0	4 0	3 0

注意

大阪管区气象台から発表される天候の 1 か月予報の表現が、平成 1 8 年 9 月 2 5 日以降変わりました。

これまで病虫害発生予察の一つ根拠としていた天候の 1 か月予報の表現と整合性をとるため、病虫害防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「**向こう 1 か月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はともに平年並と予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成 1 8 年 5 月 29 日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままでは残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準 (人の健康を損なうおそれのない量 ; 0.01ppm) が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品 (農産物等) の流通が禁止となりました。

このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散 (ドリフト) しないように十分注意してください。

また、水田において農薬を使用するときは農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を 1 週間程度とし、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備等の措置を講じるよう努めてください。

予報本文

イネ

1 穂いもち（中晩生水稲）

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、葉いもちの発生量は平年比少ない（－）。
- （２）９月の気温は平年並または高く（－）、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの主な伝染源となる。
- （２）穂ばらみから出穂後約３週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- （３）発病に要する温度範囲は、 $14 \sim 30$ 、適温は 25 である。
- （４）出穂後曇雨天が続く場合には、傾穂期前後にも防除を行う。特に枝梗は遅くまで菌の侵入を受けるので、枝梗いもちの発生に注意する。
- （５）ヒノヒカリ、祝等、発病しやすい品種では注意する。
- （６）平成 16 、 17 年度の調査で**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認されたので、薬剤の選定にあたっては注意する。
MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

2 紋枯病（中晩生水稲）

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、発生量は平年比少ない（－）。
- （２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）高温多湿で発病が助長され、病斑が上位へ進展すると被害が大きくなる。
- （２）近年多発傾向にある。昨年多発したほ場では、浅水管理に心掛け上位葉鞘への進展を抑える。
- （３）ほ場内をよく見回り、病斑が上位へ進展している株が多い場合は使用基準を考慮し薬剤の散布を行う。

3 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）８月第３半旬現在、予察灯への飛来を認めていない。
- （２）８月中旬現在、ほ場での発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- （２） $8 \sim 9$ 月の気温が高いと増殖に好適である。
- （３）低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

4 コブノメイガ（晩生水稲）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在の発生量は、山城で平年比やや少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）幼虫が葉を筒状に綴って食害し被害痕が白く目立つが、収量・品質に影響が
でるのは上位葉の被害が多い場合のみである。少し食害が目立つ程度であれば、
収量・品質にはほとんど影響はない。

（２）晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネには成虫が集中的に飛
来するので注意する。

5 斑点米カメムシ類（中晩生水稲）

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

（１）８月中旬現在、本田での発生量は平年並。

（２）８月中旬現在、畦畔雑草での発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類が
いるが、近年、カスミカメムシ類による被害が増加している。

（２）近年、多発し問題となっている地帯では、穂揃期と傾穂期の防除（共同、
一斉）が有効である。

発生予察注意報第２号を参照のこと。

ダイズ

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬の巡回調査では、発生量は平年比少ない（-）。

（２）８月第３半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない
（-）～並。

（３）普及センター、病害虫調査協力員等からの報告では、白変葉が認められて
いる。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除く。

（２）齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、
若齢幼虫期の防除が重要である。

2 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。

（２）８月第３半旬現在、予察灯への飛来数は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 吸実性カメムシ類にはアオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ等がいる。
- (2) 莢がつきはじめる頃から飛来し増殖、黄変する時期まで加害を続ける。
- (3) ほ場周辺に雑草地などカメムシ類の発生しやすい場所があると、被害を受けやすいので注意する。
- (4) 薬剤散布は若莢期から10日間隔で2～3回実施する。

3 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比少ない（-）。
- (2) 9月の気温は平年並または高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖が早く、高密度になってからでは防除効果が劣る。
- (2) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

4 子実害虫類（サヤムシガ類など）

被害を確認してからでは、手遅れとなることが多いので注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類との同時防除を考慮する。

アズキ

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬の巡回調査では、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない（-）～並。
- (3) 普及センター、病虫害調査協力員等からの報告では、白変葉が認められている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ダイズの病虫害の項参照のこと。

2 ハダニ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 9月の気温は平年並または高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖が早く、高密度になってからでは防除効果が劣る。
- (2) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。

- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

3 子実害虫類（アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など）

被害を確認してからでは、手遅れとなることが多いので開花始めから十分注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が茎や莢内に食入すると、防除効果が劣るので、幼虫ふ化時期～食入開始時期の防除が重要である。
- (2) 開花初めから10日間隔で2～3回の防除が有効である。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 9月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 常発園では、収穫後の防除に留意する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 9月の気温は平年並または高く（ - ）、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 夏から秋に、徒長枝に発病しやすい。
- (2) 収穫後の防除に留意する。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（ - ）。
- (2) 9月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- (2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

（２）９月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）９～１０月に雨が多いと、果実の被害が増える。

5 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年並。

（２）９月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）９月に病原菌の活動が、再び活発になる。

6 カメムシ類（カキ、ナシ、ミカンなど果樹全般）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

（１）８月第３半旬現在、予察灯への飛来数は平年並。

（２）８月第３半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は例年比やや少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。

（２）収穫が近いものも多いため、農薬の使用に当たっては使用基準を厳守する。

（３）合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、カイガラムシ類やハダニ類の発生が増えることがある。

7 ハダニ類（ナシ、ブドウ、ミカン）

予報内容 発生量：ブドウ 平年比多い（前年並）

ナシ・ミカン 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量はブドウで平年比多く（＋）、ナシで平年比やや少なく（－）、ミカンで平年比少ない（－）。

（２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- （1）8月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。
- （2）9月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- （2）秋に残った罹病葉は、翌春の伝染源となる。

2 もち病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （1）8月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （2）9月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。
- （2）山間地で発生が多い。
- （3）病原菌は、芽に付着して越冬し、翌春の伝染源となる。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年並（山城：前年比少ない）
（丹波：前年並）

発生時期：第4世代幼虫ふ化期

10月第1半旬～10月第3半旬（平年並）

予報の根拠

- （1）8月中旬現在、発生量は平年並。
- （2）8月第4半旬現在、フェロモントラップへの誘殺盛期は平年並。
- （3）9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）通常、第4世代幼虫が10月上旬～10月中旬に発生し、綴った葉の中で越冬して翌春の発生源となる。
- （2）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年比やや多い）

発生時期：第5世代幼虫ふ化期

山城 10月第1半旬～10月第3半旬（平年比遅い）

丹波 9月第5半旬～10月第1半旬（平年並）

予報の根拠

- （1）8月中旬現在、第4世代幼虫の発生量は、山城で平年比やや少なく（-）、丹波で平年並。

(2) 8 月第 4 半旬現在、フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市では平年比遅く、綾部市では平年並。

(3) 9 月の気温は平年並または高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 通常、5 回世代を繰り返し、9 月中下旬に第 4 世代成虫が発生し産卵する。

(2) 卵は 3 ~ 7 日でふ化し、新芽を加害する。

(3) 第 5 世代幼虫ふ化期が、最終の防除時期にあたるので、多発園では防除を徹底する。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並 ~ やや多い (前年並)

予報の根拠

(1) 8 月中旬現在、発生量は平年並。

(2) 9 月の気温は平年並または高く (+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 繁殖力は 10 ~ 30 の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

(2) 通常、盛夏に発生が減少するが、秋になると再び増加することがある。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない (前年比やや多い)

丹波 平年比多い (前年比多い)

発生時期：秋芽伸育期

予報の根拠

(1) 8 月中旬現在、発生量は山城で平年比少なく (-)、丹波で平年比多い (+)。

(2) 9 月の気温は平年並または高く (+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等である。

(2) 少雨で乾燥した条件で増加しやすい。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年並 ~ やや多い (前年並)

丹波 平年比やや少ない ~ 並 (前年比少ない)

発生時期：秋芽伸育期

予報の根拠

(1) 8 月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや少ない (-)。

(2) 9 月の気温は平年並または高く (+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。

(2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。

(3) 発生密度が高いと 1 回の防除では効果が劣るので、5 ~ 7 日おきに 2 回の防除が必要である。

8 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比少ない）
丹波 平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）年間３回（一部山間部では２回）発生する。

（２）通常、防除適期である第３世代幼虫ふ化期は、９月下旬から１０月上旬である。

（３）多発している園も認められるので、園を見回り発生が多い園では防除する。

9 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成１６年８月に国内で初めてチャへの寄生が確認され、分布の拡大が懸念されている。巡回調査では山城地域で発生が認められ、多発ほ場も確認されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）成虫は年４回発生する。

（２）農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

（３）幼虫は、うねのすそ部や葉層内部の古葉の裏面に寄生するので、薬剤散布を丁寧に行う。

野菜

1 うどんこ病（果菜類）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）～並。

（２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。

2 疫病・褐色腐敗病（キュウリ、ナス、トウガラシ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

（２）９月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）水によりまん延することが多く、多湿条件下で発生が多い。

（２）ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排水する。

（３）マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。

3 褐斑病（キュウリ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。
- （２）９月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）褐斑病の発病適温は２５～３０である。
- （２）一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。

4 炭そ病（キュウリ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （２）９月の気温は平年並または高く、降水量、日照時間はいずれも平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）露地栽培では、秋雨の続く頃に多発しやすい。
- （２）気温が高く降雨があると急激にまん延するので、早めの防除を心がける。

5 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年並～やや多い（前年並）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、発生量はキュウリで平年比やや多く（＋）、トウガラシで平年並、ナスで平年比やや少ない（－）。
- （２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- （２）ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- （３）雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

6 アブラムシ類（アブラナ科、キュウリ、ナス、ハウレンソウなど）

予報内容 発生量：平年並～やや多い（前年並）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、発生量はキュウリで平年比やや多く（＋）、トウガラシで平年並、ナスで平年比やや少ない（－）。
- （２）８月第４半旬現在、黄色水盤への飛来数は例年並。
- （３）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- （２）通常、無翅虫で集団加害する。
- （３）密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- （４）高温、乾燥が続くと発生が多くなる。

7 アザミウマ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや少ない～並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量はキュウリ、トウガラシで平年並、ナスで平年比少ない（－）。

（２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するものもいる。

（２）雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。

8 ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年並。

（２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）年間、１０世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。

（２）葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

9 ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。

（２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

10 ハモグリバエ類（果菜類等）

予報内容 発生量：平年並～やや多い（前年並）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年並。

（２）９月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）トマトハモグリバエは、８月以降多発する傾向がある。

（２）シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。

（３）幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は３日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後、速やかに行い防除時期を逸しないようにする。

1 1 コナガ(アブラナ科)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 8月第3半旬現在、予察灯への飛来数は、京田辺市で平年比少なく(-)、亀岡市でやや多く(+)、京丹後市で多い(+)
- (2) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は亀岡市で平年比少なく(-)、京丹後市でやや少ない(-)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (3) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

1 2 シロオビノメイガ(ホウレンソウ)

予報内容 発生量：平年比やや少ない~並

予報の根拠

- (1) 8月第3半旬現在、予察灯への飛来数は平年比やや少ない(-)~平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晩夏以降に多発するようになる。
- (2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。
- (3) 雨よけハウスでは多発しやすいので注意する。

1 3 ハスモンヨトウ(野菜全般)

予報内容 発生量：平年比やや少ない~並(前年並)

予報の根拠

- (1) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない(-)~並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 早期発見に努める。ダイズやサトイモなどハスモンヨトウの初発の確認しやすい寄生作物上の発生状況を観察する。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

1 4 軟腐病(キャベツ、ハクサイ、カブなど)

発生すると大きな被害になるので予防防除に努める。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。
- (2) 台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多い。

1 5 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus)の感染により引き起こされる病気である。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認された。

最近では、平成19年6月に、発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

発生生態及び防除上注意すべき事項

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。そのためには、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

防除対策の基本事項

- ・施設内にウイルス・コナジラミを「入れない」。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

- (1) タバココナジラミ類を介して伝染するので、発生状況に注意する。
- (2) 苗を購入する時は、コナジラミ類が寄生していないか、先端部の葉が黄色くなって表側が巻いていないかを確認し、健全な苗を植え付ける。
- (3) 発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。
- (4) 野良ばえトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。
- (5) 開口部（サイド、出入口、天窗等）すべてを0.4mm目合いの防虫ネットで被覆する。出入口は2重に被覆する。
- (6) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (7) 近紫外線カットフィルムを使用する。
- (8) コナジラミ類に対する発生初期の防除を徹底する。薬剤で防除する場合は、葉裏までていねいに散布する。
- (9) 同一系統の薬剤の連用は薬剤感受性の低下につながるため、ローテーション防除を実施する。
- (10) 天敵や微生物農薬を有効利用する。
- (11) ラノーテープを使用する場合は、定植直後から使用する。
- (12) 黄色粘着板を吊り下げて、コナジラミ類の発生を把握する。

1.6 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。国内では在来系統（バイオタイプJpL）、バイオタイプB（従来シルバリーフコナジラミ）、バイオタイプQが確認されている。

農業総合研究所と病害虫防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生していることが判った。平成17年にはバイオタイプQが府内で初めて確認され、平成18年には綾部市まで発生地域が拡大した。

タバココナジラミ類は、夏以降発生が増加し、また、薬剤感受性が低く難防除害虫といわれていることから、総合的な防除対策（トマト黄化葉巻病参照のこと）が必要である。

1.7 オオタバコガ、タバコガ、シロイチモジヨトウ

発生すると大きな被害になるので注意する。

オオタバコガ及びタバコガは果実に食入すると、またシロイチモジヨトウは齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

1.8 ワタヘリクロノメイガ〔ウリノメイガ〕（キュウリ）

果実を食害するため、密度が低くても大きな被害になるので発生に注意する。

19 ハイマダラノメイガ〔ダイコンシンクイムシ〕（アブラナ科）

生育初期に加害されると、大きな被害になるので注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 苗床や定植直後によく観察し、発生を認めたら直ちに防除する。
- (2) は種直後から寒冷紗等で被覆を行い、産卵を防ぐ。

病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コナ」をご覧ください。

ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧

	農業改良普及センター	電話番号
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病虫害情報サービス

- ・テレホンサービス
0771-23-6442
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成 9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-9513

0771-23-6539